

[連載]

博士課程生活講座!
～茂木さんに聞いてみよう～
第1回 「全体」を見るトレーニングをしよう

茂木俊伸

若手研究者から院生に送るエッセーです。ちょっと先輩の声に耳を傾けてみませんか？ 何か新しい世界が見えてくるはずですよ。

[企画]

大学院生にぜひ、
おすすめしたいクラシック
大学院生応援企画「ビブリオバトル」
(2014年3月17日開催) より

日本語／日本語教育研究会では、2014年3月17日（月）に大学院生応援企画としてビブリオバトルを行いました。テーマは「大学院生にぜひ、おすすめしたいクラシック」。当日、取り上げられた作品は以下の通りです。

益岡隆志著『命題の文法—日本語文法序説』

ポリー・ザトラウスキー著

『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察』

奥津敬一郎著『「ボクハウナギダ」の文法—ダとノ』

鈴木重幸著『日本語文法・形態論』

神尾昭雄著『情報のなわ張り理論—言語の機能的分析』

ビブリオバトルに来られなかった人のために、ここでは各登壇者に報告を書いてもらいました。お楽しみください。

総務委員 岩田・建石

第1回 「全体」を見るトレーニングをしよう

茂木俊伸 (熊本大学)

このエッセイでは、日本語学・日本語教育学分野の博士課程（博士後期課程）にいる人、または博士課程に進学しようと考えている人に向けて、若手（だと自分では思っている）大学教員が、自分の経験の中で「後輩たちの役に立ちそうなこと」について語ります。

1 研究者になるまでのステップ

博士課程の入口から出口までの間には、おおよそ次のステップがあります。

- ① 博士課程に進学する前にすべき／考えるべきこと（進路選択）
- ② 在学中にすべき／考えるべきこと（研究者としてのトレーニング）
- ③ 職を得るためにすべき／考えるべきこと（就職活動）

特に①については、水月（2007）以降、博士課程への進学が一定のリスクを伴うことが一般にも知られるようになりました。一方、②以降については、フィリップス&ピュー（2010）のような一般的な概説書や、関連分野では庵（2013）や本田ほか（2014）のようなガイド的な（内容を含む）本も出てきていますが、まだまだ学生が取捨選択できるほどの情報は共有されていないと感じます。この場を借りて筆者の経験を語るこの意味は、ここにあります。

2 三つの研究計画

博士課程では、先の②のイメージを持ちながら①を考え、③のイメージを持ちながら②を考える、というように、次のステップを先取りしながら準備を進めることが大事です。例えば、筆者が博士課程の面接試験の準備について相談されたら、次の「三つの研究計画」を用意するようアドバイスします。

- (a) 博士課程に入った1年目の研究計画（短期的視点）
- (b) 学位取得までの3年間の研究計画（中期的視点）
- (c) 学位を取った後にも続く研究計画（長期的視点）

まず (a) は、博士課程に入ってからすぐに着手する研究の内容です。博士論文（学位請求論文）を書く前に、「学会誌などに論文を○編書いていること」といった条件が課されるのが一般的ですが、学会誌への投稿は半年から1年がかりの大仕事ですので、まずは何を書くかが重要です。

(b) は、どのような博士論文を書きたいか、です。入試の際に提出する「研究計画書」は、このスパンのもので、(a) のような論文をどのように積み重ねて一つの研究にするのか、という全体像が説明できれば、3年間の過ごし方がきちんとイメージできていることになります。

最後の (c) は、博士論文の研究がどのように発展するか、あるいはどのような研究者を目指すか、という大学院修了後の展開のイメージです。自分の専門分野に関する「夢」を語ると言ってもいいでしょう。博士の学位はあくまでも通過点です。自分の研究にどのような可能性があり、それが学界や自分の人生にどのように影響しうるのかを、ぜひ語ってほしいところです。

筆者の経験では、みんな (a) は詳細に語れます。しかし、手持ちの材料がそれだけでは、そのうち息切れします。また、(b) や (c) を考えているようでも、「学位が取れたらなぁ」という漠然としたイメージにとどまっている人がいます。プロになるために「自分なら」具体的にどうする

のか、どうしたいのかを、たとえ未熟な形であっても真剣に考えておく必要があるでしょう。

3 部分と全体を往復する力

最初の話(①～③)と今の話(a)～(c)に共通するのは、「今、目の前にあること」(部分)を「より大きなこと」(全体)の中に位置付ける、という点です。自分の研究過程を客観視することで、今の自分がしていること、しなければならぬことの意味を確認する、と言い換えてもいいかもしれませぬ。

そもそも、研究の「プロ」とは、どのような能力を持った人を言うのでしょうか。筆者は学生の頃、「料理人」のイメージを重ねていました。これは、研究会での先生方の鋭い質問や、懇親会での「この議論だったらこの現象でも同じことが言えない?」といった話を見聞きした経験によるものです。初めて見た材料でも料理の手順と理想の出来上がりが想像できる、料理の出来上がりを見て他の材料や手法の可能性が指摘できる(しかも和食だけでなく専門外の中華や洋食でも!)というのが「スゴい!」と思ったわけです。その後、「で、君ならどうする?」と(素人なのに)何度も話に巻き込まれるうちに、プロたちは知識の有無にかかわらず、具体的な目に見える現象(部分)と抽象的な議論の組み立て(全体)との間を自由に行き来している、ということに気がきました。

論文を書くということは、言ってみれば、「一人で行う研究プロジェクト」を立案・実行することだと言えます。指導教員などの周囲のサポートはありますが、基本的に自分でプロジェクトを完結させられるだけの力をつけなければなりません。このとき、「目の前にあること」(部分)を「より大きなこと」(全体)から考えるという先読みの意識が、常に必要になります。

例えば、(a)のステップで「自分の研究に「で?」って反応が返ってきた。どうしよう……」ということが起こるかもしれません。通常、研究では「新しさ(新規性)」をアピールしなさい、と習います。しかし、「今まで詳

しく分析されていない現象を扱いました」というだけでは、初めてその研究に触れた人は、間違いなく「だから?」という疑問を持ちます。「どうなっているか」だけではなく「それが何を意味するか」「それはなぜか」という解釈が知りたいのです。そのために、「より大きなこと」と照らし合わせて、「目の前にあること」にどのような価値や可能性があるのか、というストーリーを示す必要があります。

また、博士論文を書く(b)うえでも、先読みの力は必要です。今まで書いたものや蓄えているアイデアを、どのように一貫した論文にまとめるか、ということは、まさに部分と全体の関係にあります。筆者と同年代の研究者に話を聞くと、「正直に言えば最初から博士論文のストーリーが見えてたわけじゃないけど、ある日つながりが見えた」という人が多いのですが、全体を意識しながら部分の意味を考え続けたからこそ、ひらめきが生まれたのだと言えます。

4 「見える」ようになるトレーニング

ではどうやったら、部分から全体をイメージし、全体から必要な部分をイメージできるようになるでしょうか。ここでは、二つの方法を紹介しましょう。

一つは、論文を読む、学会や研究会で発表を聞く、といったインプットを使った、研究の「考え方」や論理をつかむ訓練です。「目の前にあること」がどこにつながるのかの感触が得たくて、筆者も研究テーマに関する論文を読みまくりましたが、途中で知識量だけが問題なのではないと気付きました。インプットの目的は、単なる「もの知り」になることではありませんよね。

ここで重要なのは、「著者／発表者が見ようとしているもの」を仮想体験しようとする意識です。議論の細部を見るだけでなく、「この人は自分の研究の意味をどう述べているのか」「この現象をどう解釈しているのか」「なぜこのような結論になるのか」といった視点から、他者の研究の要点と流れを捉えてみましょう（論文の場合は、箇条書きや図にしてみます）。読書

会を開いて、ある論文の要点や意義についてみんなで検討したり、仲間や後輩の研究にこのような視点からコメントを考えたりするのも効果的です。このような「考え方」のモデル作りには、他分野の研究もヒントになります。学生時代に見聞きするものはすべて自分に関係付けて考える習慣をつけるといいでしょう。

もう一つは、直接的に「目の前のもの」から「より大きなもの」を組み立ててみることです。例えば、自分の書き溜めたもの（論文やレジュメ、メモ）を広いスペースに並べてみて、自分の関心の対象や議論のポイントに共通点はないかを考えてみます。この共通点が、「より大きなもの」の土台になる可能性のある候補です。逆に、手持ちの材料の他に、その土台に乗せられそうなトピックはないかを考えてみることもできます。このようにして全体の見取り図ができたなら、それを並べ直したものが論文の目次になるわけです。

今回は、分かっているもなかなかイメージしにくい「全体」をどのように考えるかについて取り上げました。ただ、全体のイメージだけがあっても、部分を作る力がなければ研究は先に進みません。まずはきちんと現象を捕まえられる力を付けながら、こつこつと日常の研究を積み上げ、そのうえで定期的に全体を意識する機会を作る、という段階を踏むことが必要です。

参考文献

- 庵功雄（2013）『日本語教育・日本語学の「次の一手」』くろしお出版
- フィリップス， エステル M・ビュー， デレック S.（2010）『博士号のとり方—学生と指導教官のための実践ハンドブック』（角谷快彦訳）出版サポート大樹舎
- 本田弘之・岩田一成・義永美央子・渡部倫子（2014）『日本語教育学の歩き方—初学者のための研究ガイド』大阪大学出版会
- 水月昭道（2007）『高学歴ワーキングプア—「フリーター生産工場」としての大学院』（光文社新書）光文社